

### 第三節 弥生時代

#### 一 弥生時代とはどんな時代（概説）

##### 新しい文化

縄文時代に続くこの時代の始まりについては意見が分かれるが、紀元前約三五〇年ごろから北部九州を中心  
に弥生文化が成立したと考えられている。「弥生」という呼び方は、明治十七年（一八八四）東京市本郷弥生町の向ヶ岡貝塚で発見された壺形土器が、縄文土器とは異なった特徴をもつことから発見地の町名を付けて「弥生式土器」と呼び、この系統の土器を使用する時代を弥生時代と呼んでいる。

この時代は本格的な稲作の開始、青銅器や鉄器の使用など金属器の使用、紡錘車を使った新しい織物の発達などで特徴づけられるが、これらの技術は大陸から伝えられたものである。やがてこの新しい文化は日本列島の東方へと広がりを見せて、次第に前時代の人々の生活や社会を改革していった。すなわちこの時代は階級社会が芽生え、各地に小国が生じて、次の時代にさらにまとまった国家を形成していく下地が準備される。

この時代は土器の編年と埋葬施設などから出土する中国・朝鮮の文物（鏡など）の年代から前期・中期・後期と三時期に区分されるが、一時期

を約二〇〇年として紀元約三〇〇年ごろまでを「弥生時代」と呼んでいる。しかし各期を分ける年代やこの時代の終末についても異なった意見が出されている。（第5表参照）

##### 稲作の開始

稲作技術は中国大陸より朝鮮半島南部を経てまず九州の西北部に伝えられたものであるが、初期の稲作関係遺跡としては板付遺跡（福岡市）・菜畑遺跡（佐賀県唐津市）などが知られ、それらの遺跡からは水田跡・水路・炭化した籾をはじめとして大陸系の石包丁・石斧類・木製農具も出土しており、田づくりから播種・収穫に至る一連の体系化された稲作が伝えられたことを物語っている。

しかし稲作が伝えられても、それまでの狩猟・採集の生活から脱皮してしまっただけではなく、例えば菜畑遺跡から出土している弓・矢・骨製の釣り針などは前時代の生活様式が稲作開始後であってもまだ根強く引き継がれて生活の支えになっていたことを示しているものと言えよう。

このように北部九州に定着した稲作は前期の中ごろまでにはほぼ九州全体への広がりを見せるとともに、後半には瀬戸内海沿岸部の平野から

第5表 縄文晩期～弥生時代の土器の編年

(突帯文期)		(山の寺)	
縄文時代晩期		夜臼	
弥 生 時 代	前期	B. C. 350	板付 I
			板付 II A B C
	中期	B. C. 150	城ノ越
			須玖 I 須玖 II
	後期	A. D. 50	高三瀧
			下大隈 西 新
	A. D. 300		

（『福岡県の歴史』光文館 1990より）

大阪湾岸、さらに内陸部を経て伊勢湾沿岸まで伝播されている。そして中期の中ごろには青森までも広がりを見せて、稲作文化は日本列島の大部分を覆うようになるが、後期には水田開発は爆発的とも言われるように低湿地から扇状地などの微高地へも拡大を見せるようになる。

土器の移り変わり

弥生土器は用土・焼成のしかたなどにおいては縄文土器と大きく異なるものではなく、胎土中（たいどちゆう）にかなりの砂粒を含み、摂氏六〇〇度をやや上回る酸化炎で焼成した土器である。したがって一般的には表面は赤褐色を帯びた極めて軟質の焼き物である。時期によって沈線や突帯などで文様と変化をつけたものも見られるが、全体としては縄文土器に比較して器形も単調で装飾性にも乏しい。

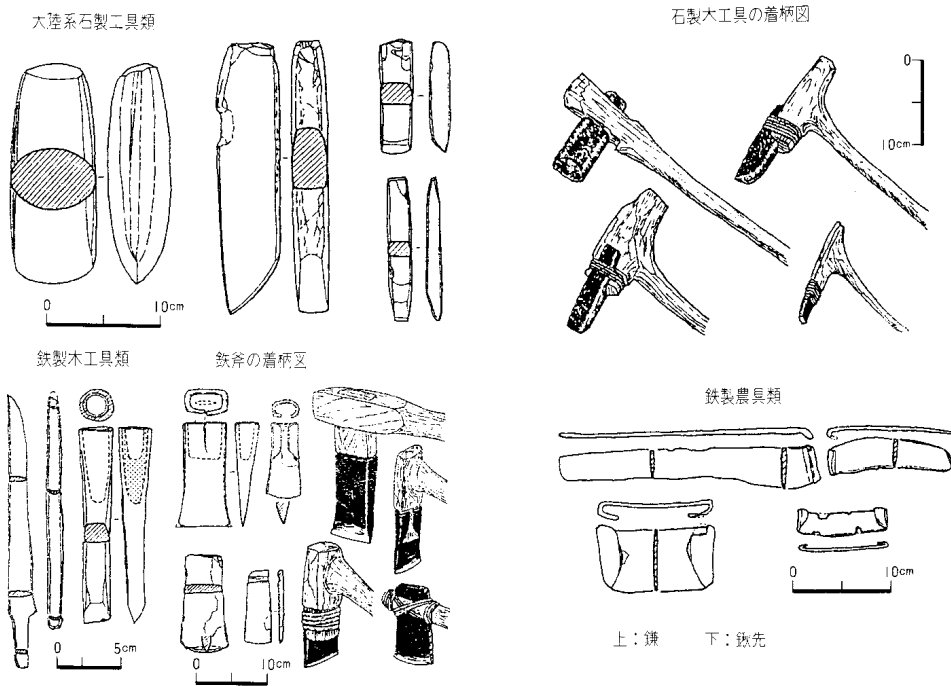
器種は大きく甕形土器・壺形土器・高杯形土器の三種類に分けられるが、甕形土器は煮炊き用、壺形土器は食料（米・麦など）の貯蔵用、高杯土器は主に祭祀用としてそれぞれの使用目的に合わせて作られるようになるが、このような実用的な土器の組み合わせは弥生時代前期には既に見られる。（第23図参照）

石器から金属器へ

縄文時代晩期末ごろ日本に稲作技術が伝えられると同時に、大陸系の磨製石器に加えて金属器も伝えられ、これまで石器だけを道具として使用していた長い時代から脱して、石器と金属器とを併用する時代に入る。しかし鉄器を主体にした道具が普及するにつれて、石器は一部を除いてこの時代の中ごろから急速に姿を消していくようになる。

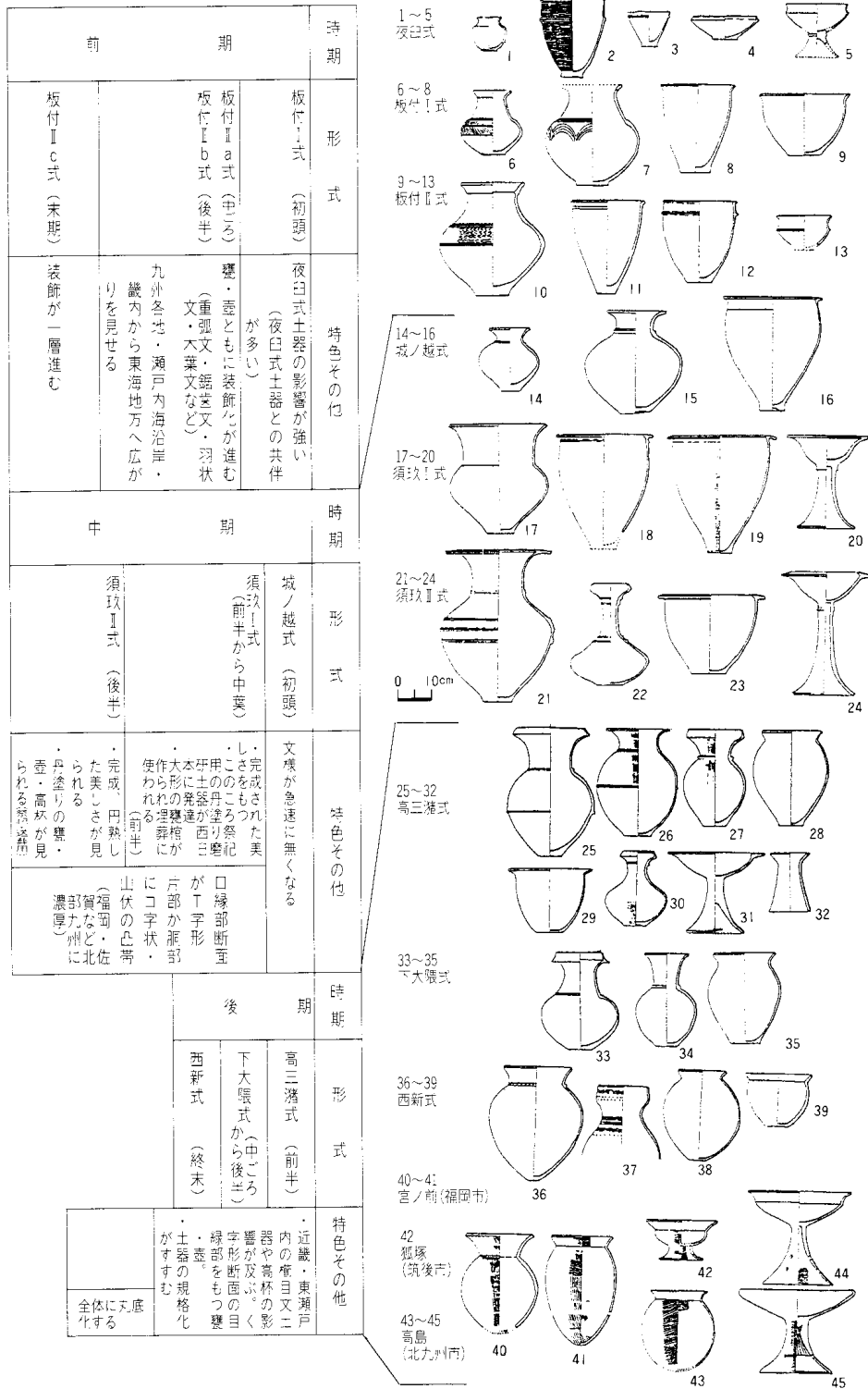
このことを時期的にみると、弥生時代になっても狩猟具としての石鏃（いしじやく）は引き続き使用されていたが、稲作とともに朝鮮半島より工具や収穫

第22図 石器と金属器



（『日本歴史大系』原始・古代 山川出版 1991より）

第23図 弥生時代の土器の特色と移り変わり



(土器図は佐原真編『弥生土器』I 1983より)

具としての磨製された石包丁・石鎌・挟入片刃石斧・扁平片刃石斧などが伝えられるとともに鉄器（鉈・刀子）も伝えられている。しかしまだしばらくは石器の使用が中心であり、金属器は石器の補助的な役割しか果たさなかった。

前期の終わりがろから中期の初めごろにかけて鏡・細形銅剣・銅矛・銅戈などの青銅武器がもたらされるが、日本ではそれが宝器とされて、特定の有力者（王）の甕棺などに副葬されようになった。また中期の前半には青銅器の国産化も始められる。中期の中ごろになって鉄器の国産化が始まるにつれ、石包丁以外の石器は急速に姿を消していくが、副葬品の中に鉄器も見られるようになる。さらにこのころから前漢鏡の流入も始まり、副葬品に加えられる。

後期になるとさらに鉄製の武器・農工具が激増し、鉄刀・鉄斧・鉄鋤（鍬）先が住居跡からも出土するようになるが、青銅武器は次第に大形化して実用性も失い、当初の宝器から共同体の祭器へと変化をしていく。また後期には後漢鏡も流入して副葬されるが、小型仿製鏡もこのころ作られ、副葬品として出土する。石器では小形化した石包丁が後期終末まで見られる。（第23図参照）

#### さまざまな墓制

弥生時代になるとさまざまな埋葬施設が現れる。それには土壙墓・甕棺墓・箱式石棺墓・木棺墓・支石墓などさまざまな形態が見られるが、しかしこれらの埋葬施設がすべての地域に普遍的なものではなく、また幾つかのこれらの埋葬形態で墓域が形成されていることが多い。そしてこれらの埋葬施設は群集して発見されることが多いが、共同体を構成する人々の共同墓地である。それらの形態やそれに埋納された副葬品の在り方は弥生時代の社会構造の

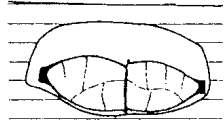
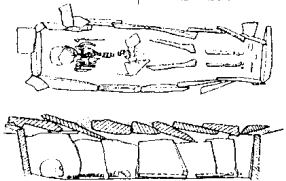
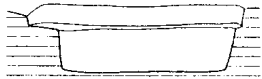
変化を捉えていくうえで貴重なものである。（第6表参照）

#### 稲作と社会の変化

稲作を行うようになって、人々の生活はそれらから脱皮できないまでも、自然に積極的に働きかけて食料を生産するという前時代とはまた質の異なった生活を営むようになった。稲作にはそのための土地の確保と多量の水が必要とされ、水田の開発と用水路の開鑿とその維持管理にはそれまでの家族的な小集団の労働をはるかに超えた共同作業の必要性が生まれた。このことから家族中心の社会から次第に地縁集団の社会へと広がりをもたせ、「ムラ」とよばれる集落が出現して、農耕社会の形成が進んでいった。そして稲作にとって特に河川は重要な役割をもつために有力な「ムラ」の首長を中心に川筋ごとに幾つもの「ムラ」がまとまった形の地域圏が形成されていったものと考えられている。

弥生時代の日本（倭）のようすについては中国の歴史書に記述されているが、紀元前一・二世紀のことを記した『前漢書』地理志の燕地の条に「楽浪海中倭人あり。分かれて百余国となる。歳時を以て来り献見する」とあり、史書でのこの国は地域圏として政治的にまとまった形のものを目指していると考えられており、このような国を治めるようになった大首長を王と呼んでいる。そしてこのころ、既に朝鮮半島北部に設置された漢の四郡の一つである楽浪郡との交渉をもつ幾つかの国々のあったことを物語っている。さらに『後漢書』東夷伝倭の項に「建武中元二年（五七）、倭の奴国奉貢朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜うに印綬をもつてす」と奴国の朝貢の記事があるが、天明四年（一七八四）に博多湾北部の志賀島から発見された金印に

第6表 弥生時代の墳墓

埋葬施設	形態	時期	特徴	その他
甕棺 <small>かめかみ</small>	甕形土器を使用する 	前期中ごろ～後期 ※中期に盛行	合口甕棺と単棺とがある。	北部九州に濃密に分布群集墳を形成する 福岡県・佐賀県が中心 青銅器はほとんど甕棺から出土
箱式石棺 <small>こぶせいせきかみ</small>	板状石材を長方形に組み合わせ、石蓋や木蓋で覆う 	前期～後期 ※後期に盛行する	大人用と子供用が見られる	北部九州や山口県を主な分布圏とする 群集墳を形成することが多い 副葬品は少ない。前期～中期(初)…小形壺、後期…刀子・など。青銅器(鏡など)は特別な者に埋納する。
支石墓 <small>さいせきぼ</small>	甕棺、箱式石棺、土壇、木棺などの上部の扁平な蓋石とその支え石	縄文時代終末～弥生中ごろ	副葬品は極めて少ない	朝鮮半島の影響を受ける唐津平野や糸島平野が中心 西九州では群集墳として北九州では特殊墓として
土壇墓 <small>つちだんぼ</small>	地表を凹形・長方形・隅丸方形に掘る 	縄文・弥生時代～	甕棺や箱式石棺にまじって墓地を形成する	北九州に最も多く分布する 石で蓋をするものを石蓋土壇として切り雑すこともある
木棺墓 <small>こくわんぼ</small>	土壌中に四枚の板材で箱形を作る	弥生前期初頭～後期		弥生墓制の基をなしている
方形周溝墓 <small>かたがたしゅうこうぼ</small>	主体部に周りに溝をめぐらす。VまたはU字の溝。	弥生後期～古墳時代中ごろまで	内部主体は木棺・土壇・石棺・甕棺(壺棺)	畿内に起源(前期後半)し、東西に広まる 九州～牽関東にかけて
墳丘墓 <small>ぼんきゅうぼ</small>	盛り土により墓域を形づくる(方形・円形・長方形・楕円形)	北部九州では弥生終末ごろに出現	内部主体は箱式石棺が多い	一墳丘内に二基以上の主体部をもつものが多い 副葬品は一般に貧弱 ※周匝を削り出して作る台状墓もある

「漢委奴国王」<sup>かんわのわのこてくわう</sup>とあり、これがこの時の印綬とされるが、奴国は博多湾に面して形成された地域国家の一つで、後漢の光武帝に朝貢して承認されたことを意味している。

それから五〇年後の永初元年（二〇七）には「倭国王帥升等」<sup>やまのこてくわうしゅうしやうたうらう</sup>が朝貢して「生口百六十人」を献上したと同じ東夷伝倭の項に記されているが、「帥升等」とあることから帥升が盟主となっていた北部九州の幾つかの国々の代表として朝貢したものと考えられており、その代表となる国は伊都国（糸島郡付近）か末盧国（唐津市付近）と考えられている。このことは奴国の段階からさらに進んで北部九州には大きい政治的な連合関係ができていたことを考えさせる。

次に二世紀の中ごろから終わり（弥生時代後期）のことについて「倭国大乱」のことが記されている（『魏志倭人伝』『後漢書』東夷伝倭の項）が、国々が互いに攻防を繰り返して後に女王卑弥呼を立て争乱が収まったという。

卑弥呼の治める耶馬台国は、それが大和にあったのか九州にあったのか所在地をめぐり意見が分かれていて決着はみていないが、その管下には対馬国（対馬島）・一支国（壱岐島）・末盧国・伊都国・奴国など三〇近くの国があり、それらの連合したものであるが、この記事は三世紀（弥生時代後期）になって小さな「クニグニ」が大きな「クニ」へとさらに統合の進んだことを意味している。

特に卑弥呼については「婢千人をその身辺に侍らせ、ただ一人の男子が飲食を給し、女王のことばを伝えるのに居処へ出入りした。宮殿、物見楼、城柵などは厳重に設けられ、つねに兵器をもった人々がそれを守衛していた。……（卑弥呼が死んだあと）大いに塚をつくり、その径は百

余歩、殉葬された奴婢は百余人であった」（『魏志倭人伝』）と記述している。

## 二 京都・行橋地方の弥生時代

弥生時代に入ると、この地方の遺跡数は爆発的とも言えるまでに増加し始め、周防灘に面した海岸部から祓川・今川・長峽川などの河川沿いの河岸段丘・丘陵・台地上を中心として内陸部深くまで濃密な分布が見られるようになる。全体的には生産関係では、稲作の本格的な開始と普及を示す石包丁・石鎌・木鍬・杵・炭化米などの遺物が見られるようになり、さらに水稻栽培による生活基盤の安定から、人口の増加に伴って下稗田遺跡などに見られるような大集落が出現し、その中では母村とそれから分離していく分村の関係も見られるようになる。そしてこのような拠点集落と考えられる集落が各地域に出現してくる。

鉄斧など鉄器の出土は、この時代から鉄器が加工具として生活上の利器となり始めたことを示しているが、しかし依然として石器は使用され、石鎌（打製・磨製）・石包丁（大型も）・片刃石斧・挟入石斧・石剣・石戈・大型蛤刃石斧が出土するが、後期になると少なくなる。

また墓制も多様化し、箱式石棺・甕棺・土壙墓・木棺墓などが集落からあまり遠くない場所に集団墓の形で営まれ、墓域内にはそれに伴う祭祀遺跡も見られるようになる。

次にこれを時期的に眺めると、京都平野の弥生時代前期初頭の遺跡には長井砂丘遺跡（行橋市）があり、縄文晩期と弥生初頭をつなぐ遺跡として知られているが、夜臼式土器・板付Ⅰ式土器や朝鮮式無文土器が出土して、周防灘に面したこの地域で最も早く稲作の開始された場所